

ある。

(引揚者団体北海道連合会

副会長 佐藤 晴夫)

満州聚和義勇開拓団の惨状

北海道 米 司 好 美

終戦間近の開拓団の状況

私は四小隊でしたが四、五小隊は身長順に並んで番号をかけ、右向け右で二列になって前列が四小隊に分けられた記憶があります。

従つて徴兵検査も満二十歳に達しない者わずかを残して、四、五小隊と一緒に検査を受けたのですが高橋君と私は飛行兵の第一補充兵となり、入隊の通知はきませんでした。

本部の採種圃が青年班として私と加国君、それに本部の浅津君が応援に加わつて三人でやることになっていた。入隊通知が来ないのなら一年でも早く第二部落

に行きたいと、団長に相談したら「決定したことは変更しないが、行くことは止めない」と言われて第二部落に入りました。

青年班は解散して、加国君と浅津君は兵役を早く済ませる意味で志願兵となり入隊したところ、除隊してきた佐藤周三郎さんに召集札状がきたのかわきりに、十九年春に本部は十四戸の留守家族が出来てしまった。

団本部では今後の対策について協議が行われたが、精神主義だけではどうにもならんような気がして、考えさせて欲しいといつて、具体的なことは言わないで帰った。

あくる日私は、留守家族は自給の野菜だけ作つて、他の耕作は無理であるから中止してはどうか、私は勤労奉仕のかわりに各戸に馬の野草を一トンずつと、主食に混ぜる金時豆を百キロ進呈しますと申し入れた。

しかしその秋の全量を提供しても足りない状態で、草は馬車一台ずつ、豆は南京袋に軽く一ばいでかんべんしてもらつた。草も共同で取りに来た人は多く積ん

だが、一人で来た人は幾らも積んで行けなかったし、取りに来れなかった人もあったようだ。

こんなことでは到底みんなが復員するまで持たないと思いました。子供を抱えて馬の世話からその日の燃料の蓬刈りで一日が終る。これで大雪が降ったり、病気に掛かったりしたらと不安が一ぱいでした。私は今までは一番若い方でいつもみんなの後ろからついていけばよかったが、今は自分しかないのだ。自分が考えなくてはならぬのだと気付いて、寒い二月の夜団長の自宅を訪ねました。

十四戸の共同でやれば炊事・託児所の他に明日からの当番の準備役を補佐に一人つけても三人で切り盛り出来る。十一人は畑に出られる。二戸に一人の割で苦力を入れ、この七人に畑と馬農具を貸して耕作させれば、穀物は彼らに与えても馬糧と燃料が手に入り、畑も管理出来るというものであった。

団長も「全く処置なしなのだ、帰国させることは『国の決戦輸送をじゃまするな』と言われるし、君の言う通りやるしかない。任せる。」ということになり、春

の蒔き付けまでに共同生活が始まりました。

託児所は朝食に来るとき連れてきて、夕食後連れて帰る。その間の食事からおむつの洗濯、入浴まで済ませるもので、これはお母さん方の自然に出来たルールでした。炊事は前日補佐役の日に自分の好みで用意し、一人で自由に調理することにしてあったので毎日、今日は何が出来ているだろうかと楽しみになるほどでした。

男二人、奉仕隊五人、女十四人（内一人今井さんは第一部落にいた）子供八人の大世帯であったが、今井さんの監視のもとに味瓜一町歩、エゴマ一町歩、白菜一町歩の畑に苦力と折半で作らせた。白菜は豚の餌料に、味瓜とエゴマは耕作禁止を逆手にとつて、ヤミで現金収入を得ようというもので高橋君の提案でした。

ところが本部部落の高野さんに続いて、団長や農事指導員の荒町さん第三部落の者が召集されていった。残ったのは本部勤務の杉原さん、柴田さん、牛舎の跡部さん、病院の井上定男さん。そして耕作にたずさわる者は高橋君と私、第二部落の丸橋さんの三人で、こ

れに吉良先生と柴田父子これが団員最後の男の総勢であり、婦女子約三十人を加えたものが開拓団の姿でした。

八月九日ソ連軍が侵入してきた情報を杉原さんが伝えて来てくれました。訥河の街も燈火管制をしいているが、懐中電灯で信号を送っている者がいる。多分スパイだという噂を聞いていたが遠からず決着がつく時が来ると思った。それは負けるというより神風がどんな型で吹いてくるだろうかという期待であった。

二日後の十三日（したがってソ連参戦の情報は一兩日遅れて入っている）全員引き揚げるよう南学田から馬による伝令が入った。不覚にも電話当番がいなくて、聚和に連絡がつかず、南学田から引き揚げ途中に廻って知らせてくれたものであった。

密かに全員におしめと毛布、飯盒と水筒だけ持って集まるよう指示し、引き揚げ準備にかかった。出来るだけ身軽がよとの判断であったが、高橋君は数台の馬車を満人から徴発してきて荷物を積んだ。唯々夢中であつたが、十時頃ようやく全員聚和を離れたような

気がする。

残った者がいないことを確認して後から走つたが、行けども行けども皆に追いつけなかつた。振り返つて遠くなつた聚和を見て、いつの日ここに帰るのだろうか郷愁に似たものを覚えた。

昼食をとつて訥南の街を出たら、半分の道程を残して日が暮れてしまった。向こうから来る満人の話を聞いたが、しきりに「チョウファイラー」と言うが橋の通れない意味であつたことを後で知ることになる。初めての野宿である。何時間たつたかさっぱり見当がつかない。誰も時計を持たなかつた。杉原さんが布団の中に目覚まし時計があるのを思い出して、探し出したが何時だつたか時間は覚えていない。真夜中だつたような気がする。それ程長い夜であつた。

明るくなつて動き出したがようやく橋が通れないことがわかつてきた。一週間ばかり降り続いた雨で増水して、橋桁が流されて渡れない。足止めをくつてここで全員がそろつた。しかし、さしつかずしてはいられない。さいわい、橋にアユミが渡してあつたので、リュック

や小さい物は人の肩で運び、馬は泳がせて渡す。そして馬の背に荷物を積んで、あとの物は放棄することにした。男は全員動員令が下っていると聞いた。早く行かないと間に合わないのではないかと気がせいた。

このころからソ連の飛行機らしい爆音が聞こえるようになる。訥河の街には各地の開拓団が集まってきて、ごった返していた。物凄い荷物を持ってきているのに驚いた。今内地から着いたばかりの朝鮮牛も移動するのを見て、これからどんな作戦が用意されているのだろうか、かすかな期待を持った。

弁事処に着いたら予想した通り、動員命令がきていたが十六日チチハル入隊とあった。まだ二日の余裕があった。

皆よりかなり遅れて高橋君が来た。「米司、あの残してきた荷物を売れるだけ売ってきた。頭の上を飛行機が飛ぶもんだから、聚和から来た満人が怖がった。

『あれは日本のだ』と言って、無理矢理持たせて、残った分はお前ら持ち帰って、保管して置け。」と言って帰したのである。

私は入隊すれば一銭も要らないのでこれを十四等分して皆に分けた。しかしこれは三年前斉藤静子さん（長沢）夫婦が尋ねて来られたとき、あのとき一銭も持たないで、大変な苦勞をしてこられた話を聞かされて、第一部落には男がいなかったことを思えば、本部の十四戸のことしか考え及ばなかった自分が、間違いをおかしていたのだと気が付いて悔を覚えました。

敗戦

弁事処で仮寝の一夜を過すが野宿したことを思えばまだまだ良い方だ。そのうち新しい指示が県の方から来るのを待つしかないと思った。私は夕方の汽車に乗るが奉公袋一つあればよいので、楽な気持ちでそのうちまた元気で会いましょうくらいに思っていたら、お昼過ぎ井上定夫さんが、「日本は敗けた。」と叫んで飛びこんできた。新しい指示を待っていたところへ日本は敗けた、である。「一体政府は我々に何をやらせようとしているのだ。」と、叫んだが涙がどっと溢れ出してきた。

しかし動員令が解除されたわけではない。これも日

本の作戦かも知れんと思つて、予定通り駅に行つたら令状を持った大勢の者が集まっていた。どこかの校長だという人が「私は断固戦う。たとえこれが不忠になつてもその汚名を喜んで着る。」と叫んでいた。私もそれに同調する気で汽車に乗り込んだ。

動員令解除

チチハルの部隊に着いて兵料と名前を聞かれ飛行兵と言つたら、「飛行部隊は満州にいない。工兵隊に入つている。」と言われた。年令も十八歳以上で二十三歳の私は翌朝の飯上げでとりあえず班長格になつて食缶返納に行つて帰つた。皆あわただしく着替えている。「どうした。」と聞いたら「動員令解除、すぐ団に帰れ。」と言うのである。

工兵隊に入れと言われて外を見た時、盛んに二人の兵隊が縄を張つて走ると、次々その下に兵隊が腕を突き出す様にして飛び込む。戦車の下に突つ込む練習をしていた。これで死ななくて済むのだと思つて、次第に戦争が終わつたことが事実のものである実感が湧いてきた。

悲劇

駅に行つたら汽車が出たあとで、これを最後に線路が増水で運行不能と言う。積み残された者は、チチハルの小学校に何十人もが足止めとなつた。

この足止めが運命を分けたような気がしてならない。私は小心なのかも知れないが国が破れた以上、出来るだけ現地人を傷つけるようなことはしてはいけないと、用心するような気持ちになつていた。

弁事処に帰つたら皆が飛び上がらぬばかりに喜んでくれたが先に帰つた者が見当たらない。尋ねたら荷物を取りに行つたという。私はとんだ危険なことをしたものだ、まちがいがなければ良いがと不吉な予感をした。日暮れになつて馬車が帰つてきた。高橋君が私を拜んでくれと言う。馬車には四人の遺体と負傷者が乗つていた。不吉な予感が適中してしまつた。しかし聞けば原住民の方にも犠牲者があつた。通称をターコーズと言う苦力も死んだ。彼の父が事件のあつた家の奥の間に病気で伏せていた。襲撃の巻き添えを食わぬために一旦遠のいていた周辺住民が夜明けに戻つてき

た。父を心配して息子が一番先に戻って来たところを、襲撃者とまちがわれて討たれた。七人の頭として、開拓団に大変協力してくれた彼は一人息子でもあった。一人残された父もやはり人間である。悲劇は双方にある悲しい事件であった。

弁事処の一室で通夜を行った。壊れた窓から野犬が入る恐れがあるので目がはなせない、傷口から吹き出す真赤な血に女の人達は震えた。せめて線香だけは絶やされなれと思つて焚き続けた。

あくる日、弁事処の一角に丸太を積んで火葬にしたが、下学田に集結するために慌しかつた記憶があるのが、その日に移動したように思う。弁事処には一週間くらい滞在したことになる。戦争は終わっているのに、置き去られた開拓者にはこれから悲劇が始まるのである。

不安な日々

本部班は、下学田の一番遠い会津部落に割当てられた。前が聚和、裏が会津の人達であった。さいわい秋田の奉仕隊が最後まで同行してくれたので助かった。

三棟に分宿して毎日不安な日が続いた。武器は全部出すようにいわれていて、何も無いと思つていた。ソ連兵が中共軍を引率して武器探しにやつてきた。電波探知器や取り上げた日本刀などを振りかざして、牧草の山まで突き刺しながら近づいてきたとき、誰かが手榴弾が有ると言い出した。私は動揺した。見つかったら銃殺ということになっていたのだ、高橋君が「おれが死んでやる。」と言つた。そのとき責任を感じた奉仕隊の石井君が布団を持ち出して野草の山に被せて手榴弾を引き出し、布団ごと家に持ち込んだ。それを見つけた中共軍が盛んにソ連兵に説明しているらしく、こちらに向かつて歩き出した。

ところが家に持ち込んだ手榴弾はオンドルに続くカマドに放り込み、草を突っ込んで火をつけた。布団はほこりを払っているところだった。そこへソ連兵が入つてきて家探しをしたが、まさか火の中に手榴弾があるとは思わないので、そのまま出て行つた。そのあと大急ぎで火を消した。熱くなった手榴弾を女達は懐に隠して次々便所に投げ込んだ。顔色一つかえないので

土壇場になると女は強いと思った。

暴徒

夕暮迫っても井戸端から満人がなかなか引き揚げない。何かあると思つて、今日はズボンも靴もはいたまま寝るように指示した。九時頃だったろうか、会津班の家から女の人が「義勇隊さん助けて。」と走り込んできた。みんなにはトウモロコシ畑に逃げるように指示して、飛び出して行ったら黒い影がさまざまな武器を持って、裏の東の家を襲っている。罵声、悲鳴、泣き声。夜襲の訓練通りシューッと声を発しながら突っ込んで行ったら、薪や煉瓦が飛んで来る、そばにいた高橋君が「米司、頭が白い。」と教えてくれた。洗いざらしの帽子が夜目にも白い、それを目がけて飛んで来たのだ。

相手が何人いるのかもわからない。賊はこちらに武器のないことも知っているのだ、それ以上は一步も近づけぬまま時間がたつていった。

暴徒は一棟襲つてまた静まり返つた。どこに行つたのか、それとも潜んでいるのか全くわからない。忍び

足で引き返して見たら、トウモロコシ畑でみんなは息を殺して隠れていた。いつもむずかる子供が心配であつたが、その母子は遠く離れた所で盛んに子供をあやしていた。ここでも母の強さを知らされる。

こんどは足音を忍ばせて、一番西の家に行つてみた。会津の人達はそこに集まっていた。部落長が行方不明だと言つて心配そうにオロオロしていたが、「とにかくここは引き揚げましょう。本部へ連絡して車で迎えるに来てもらうから、馬を貸して下さい。」とたのみ、奉仕隊の者に一里くらいは静かに、それを過ぎたら思い切り飛ばして連絡せよと指示を与えた。

死の決心をする

夜明に跡部さんがスプリングの折れた車で迎えに来た、その車に会津の老人、子供、聚和の子連れの者だけ乗って、元気な者は歩くことにした。

車が出た後で振り返つて見ると東の丘に無数の暴徒がこつちに向かつてくるではないか。みんなに早くとせかせだが、落ち着いて動じない、「米司さん、死にましょう」と言われるのである。相談したのかと聞い

た、「ウン」とうなずく、ここで一気に気のゆるむのを覚えた、そうかゝ良く決心してくれた。みんながその気ならいつでも死んでやるよ、と急に楽になった。

「おい高橋、みんな死ぬと言ってるぞ」と声をかけたら、「そうか、それならおれは便所から手榴弾を引き上げる」と、二、三人連れて行って引き上げた。場所は本部で、みんなが揃った所ということになった。

死の協議

各地区からまた人が集まったので本部はごったがえしていた。各地区共に暴徒に襲われたようだ。そして連日連夜死の協議が続けられ、聚和代表は吉良先生が当たった。

下学田に七人の在郷軍人がおる、これらの者が進駐してきたソ連兵と一騎打ちで刺し違えるから、その武器を奪って下学田と北学田の婦女子を全部死なせるというものであった。若い義勇隊の者は、興安嶺に逃げこめと言う者もいたが、その中で吉良先生は最後まで反対して、この意見はまともらなかった。

しかし北学田は既に男は連行され、残った婦女子は

毎日暴行を受けているという情報で、下学田の婦女子は男の人が行く時は、殺して行ってくれと頼む程、危機感におそわれていた。

とりあえず全員に青酸カリが渡された。しかし手榴弾があつたので、死にはぐれることはないと思ひ、全員納得するまで意見を聞くことにした。

死に方としては第一案として、子供は親がいなければ自然に死ぬから外に置いて、大人は全員輪になって、真中で手榴弾を爆発させようと言つたら、子を持つ親から子供が残つたら可哀想だから中に置くと言う。子供が前におると親が死にはぐれると思つたが、母の強い意志は変えられないだろうと思つた。

迷い

九月四日の夜、副隊長から「早まるな」と言う使いが入つたとの情報が伝わった。みんなは動揺したが、一つにまとまる条件は何も出てこなかった。思い悩むこともなく、写真を交換し合つて死んだら「鳥になつて帰る」とか「魂で帰る」とか話し合つて、夜は良く眠つたようだ。

朝、熊野さんが「夕べ主人がフイリピンから、生きて帰ってきた夢を見たので、死にたくない」と言い出した。死のうと言ひ出したのも彼女だったので、「ここまでまとまったものをなんでまた引っくり返すんだ。」と詰め寄った。

それを聞いた米重チエ子さんが、「何さ男のくせに青い顔をして、何も死にたくないと言う他人の女房と一緒に死ぬことはない。あんたは若い男なんだから、シベリアでもどこでも行ける所まで行って見れば良いではないか、私は死ぬ決心したら、何も恐しいものはない。死ぬ時が来たらいつでも一人で死んで見せる」と、大きい声で言った。和田さんはか次々に「米司さん長い間お世話になりました、米重さんの言う通りです。私達はいつでも一人で死ぬますので、どうぞ行って下さい。」と言ひ出した。

それではもう一度本部に行つて指示を仰いで来る、と出かけた。もう周辺は青酸カリを呑んだ人々が苦しまぎれに家から飛び出したり、窓から首を出して水を求める者がたくさん、それに手をかしながら本部に入

った。八時までに出發出来るよう集合せよと言う指示があつた。引きかえそうとしたら、ソ連兵にいきなり強い力でつかまって、銃をつきつけられたが小指をつき出して、「マダム」と言つたら放してくれた。みんなに出發するからと指示を伝えて、トラックに乗せる。燃料もあまりないし行先もわからないと言うが、この日本兵の運転する車に乗せるしかないと思つた。乗れるだけ乗つて、車が動き出したら全員がわつと泣き出した。それは恐ろしくて泣くのではない。最後の別れだと思つて泣くのだと思つて、「泣くな」と大きな声で叫んだが、スーッと涙が流れた。

地獄の果てに

急に死なないで行ける所まで行くことになつたが、周辺では服毒が始まつていた。死に切れない者が苦しまぎれに井戸に走る。家の中で満人に知られないように死なないと、衣服を剥ぎ取られると引き止めたら、それならこの子をどうにかしてくれと哀願されて死を助けることになつた。本部班にも親のいない子供がいた。石油をかけて火がつけられた。

みんなを乗せた車が出たところから、次々と訓練生や

開拓団の人達が集まってきて、広場が人で埋まったころ、目の前の団本部が火を吹いた。手榴弾がいくつも炸裂した。団長や幹部の家族が服毒して死に切れず、訓練生が見兼ねて火を放ち、手榴弾を投げ込んだのである。ソ連の将校も真赤な顔をして、団の代表者に声高に詰め寄っているが、言葉のわからぬことはどうしようもない。銃を空に向けて乱射して、不穏な動きを止めるのが精一ぱいのものであった。頭の上で大きく手を横に振って、前に進めの身振りをする。それに促されて、羊の群れの如く、私は先頭近くを五キロぐらい歩いた。そこは北学田である。なんと先程泣いて別れた女達がいるではないか、これでソ連がいたずらに殺すのではない、男達を連れて行くために婦女子を一か所に集める作業をしているらしいことが判って、かすかな光明がさしてきた。

男達が全部そろって、団長代理が残り、下学田の実験農家の人が男達の引率者に仕立てあげられて、北上することになったが、お互い笑って手を振って別れた

のである。

ソ連軍の捕虜

若い義勇隊員も含めて二百人くらいいたであろうか、北学田開拓団を後にしてから幾つかのなだらかな稜線を越えて小さな集落に着いたが、ここでソ連兵は頭を横に腕まくらをして寝るしぐさをして見せたが全員が入れる所ではなかった。

まだ食糧は白米を持てるだけ持って来たので各自がグループを作り飯盒炊さんに入ったがおかずになる物は誰も持っていない、この時塩が貴重なものであることを知った。

九月五日、既に霜が降りて、行先が不明だが北へ向かうところを見るとウラジオストクから日本へ帰すのだろうかと希望的観測で自分を慰めるしかなかったが婦女子を守ることから見れば、自分の身を考えるだけで、すこぶる気楽なものと思えた。

野宿は一晚であったが着いた所は嫩江部隊あとの兵舎であった。ここで隊を組みなおして次々どこかへ連れ去られて行ったが、我々は民団で軍隊ではないと強

く主張したためか、十日以上ここに置かれた。

警察官ばかりの集団も我々は民団であるといつて我々と一緒になったが、この中には解放された囚人もいた。

しかしこの人達と一緒に列車に乗せられ南へ向かったので、いよいよ南下かと沸き立ったが寧安から東に向かい、北安で降ろされた。

何回も所持品の検査と身体検査を受け、ここで軍服を渡された。寒さに向かう時だったので、これは有難かったが全部の人には当たらなかつた。軍服を買つた人は軍人として連れて行かれるのだという話が広がつて動揺した。

中には脱走を企てた者もいたが、地獄を見た下学田の者は大衆のおもむく所に行くしかないと覚悟を決め落着いていた。

すぐ貨車に乗せられたが、これは宿舍代わりで一か月位も貨車暮らし、夜中に動いたことがあつたが何という地名かわからない。然しここでは多くの日本兵の死体を見た。沢に水を汲みに行った人の話では、三十

人位も固まっていたという。私は線路傍の二人の遺体を埋めたいと思つた。胸に日本軍の番号札を付けているのではないかと思つたが、もう十一月、凍つていて動かすことはできない。凍つた土はスコップを受けつかなかつた。日中とけた土を少しづつ削つて薄くではあつたが遺体の上にかけた。

下学田で死に手を貸した時、幼児の母親は母さんも行くんだからゆるしてよッ、と悲痛な叫びと共に幼い命が次々と消えて行つたことを思い出した。

一か月かかつて国境の黒河の街に入り、三月にシベリアから解放といつて瘦せ細つた病人を中共軍に引き渡して、その人数だけ元氣な我々を代わりに連れて行く日まで待機させられていた。プログレスの収容所に入ったのは三月十日であつたのに零下、三十度ももあり寒い日であつた。

脱 走

九月五日自決を思いとどまつて、ソ連兵に連行されたあとに、現地召集で満州の部隊にいた者は残した妻子のことが気がかりで部隊を脱走して開拓団に向かっ

ていた。

北学団に集結していることを知って家族の前に姿を見せた時は、皆狂気のような喜びであったが、暴民の襲撃に抵抗して惨殺され、再び大きな衝撃を受けることになったという。

私は昭和二十三年一月引揚船で舞鶴港に上陸し、故郷に着いて地獄の苦しみから解放された。

開拓団に残された婦人の半数と子供は、中国人に預けた一人を残して、他はみんな亡くなってしまった。今生きているこの人達は生き残りなのか！死に残りなのだろうか！とつくづく考えさせられる。

満州の各地に開拓に入った開拓団の男達は昭和二十二年春頃から殆ど召集され、未青年者と老人、婦女子だけ残って農作業はできなくなった。

八月九日ソ連軍が進攻して、開拓部落を捨てて山中を行軍し野宿し、全員自決をした団もいた、自決した母親の死体の下から六人の小学生が生きて這い出して助かったのだ。

民間人がこれだけ犠牲になった。

執筆者の横顔

雄心勃勃々 ソ満国境の先端で国防に任じながら満州大陸開発に若い血潮をたぎらして渡満したのは、弱冠十五歳で満州聚和義勇開拓団に入った。昭和十三年のことである。

昭和二十年の春頃から男子の多くのものが兵役に召集がきて、開拓団の春耕計画は予定通り実施困難になつてきた。

米司氏は可能な営農計画をたてて上司に相談しても、従来通りの計画が最良のように思ったものか、なかなか新しい企画が通らない情勢であつた。

しかし、開拓営農と生活のことを考えれば、もう一度折衝しようとする情熱と誠意と企画に富んだ米司氏の方針に上司は、これを良しとし、米司氏に任せるから頼む、と言わしめた才気煥発、最も若い義勇隊開拓団員でありながら、米司氏の面目躍如にたるものとがあると称讚したい。

彼はいつの間にか部落の代表格になっていた。

納河の弁事処から、チチハル部隊に軍人として入営

の通知をうけ、直ちに馳せ参じた日が八月十五日、陛下のお言葉、終戦である。地団駄ふんで、断固戦うな」と意気まいたが、「召集解除だ、すぐ開拓団に帰れ。」と言われた。思いなおして帰団。開拓団は下学田に集結して暴徒に襲撃されたが、それに対抗したものの、未成年の男子若干名と婦女子だけではどうにもならず、死の協議した。早まって子供と共に服毒し、苦しみ井戸に走る、早く殺してくれと叫ぶ、それをみかねて子供の首をしめ殺す手助けをした。そのあと石油に火をかけた。地獄そのものである。生き残った米司氏は、ソ連に連行され強制労働を強いられたが不思議に生きてきた。それは米司氏の感覚の鋭さ、決断と行動の迅速が、シベリヤから脱走できた豪の者である。

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎)

引揚者労苦

山形県 本間 佐市

風雲急を告げる大東亜戦争は、日本軍の玉碎また玉碎、遂に八月十二日、ハルピン三七五一五部隊に繰り上げ召集となる。前戦の戦闘教練最中に部隊本部前で、無条件降伏、終戦を知る。八月十九日、現地召集全員に対し、解除命令となり、北斗義勇隊開拓団に帰郷する。第一次団員五人、補充入植、静岡中隊約四十人(当時の訓練生)、診療所医師、全員、本部を訪れ、佐伯団長に解除の報告をする。終戦により理想農村建設の夢も敗れ愕然としていたが、苦難の道に入ることに覚悟をし、全員を本部に集め団長決意のほどを、全集団郷宛、伝達するに至る。「伝達」国敗れて王道楽土建設を果し得なかつたことは残念で慚愧に堪えない、しかし敗戦日本の再建のため、これから苦難の道に入ることになる、諸君は、耐えて、生きて帰国することを